

【 3 】

氏 名	前 田 卓
	まえ だ たかし
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	文 博 第 3 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 6 月 19 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 社 会 学 専 攻
学位論文題目	祖 先 崇 拝 論 考

論文調査委員 (主査) 教授 臼井二尚 教授 島 芳夫 教授 西谷啓治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は祖先崇拜の成立・存続・衰頹の社会的要因および祖先崇拜が社会に及ぼす影響を究明したものであって、すべての論攻はローマ・中国・日本を中心とし古今東西にわたって渉猟された資料によって実証的に裏付けされている。

まず第一章においては、祖先崇拜の本質は、祖霊に対して子孫が愛慕崇拜の感情を抱くとともに、祖霊に超自然的な力を認めて、これによる庇護を祈願するところにありとし、このことを死者の扱いおよび祖霊の待遇の諸事実によって論証する。しかして人類は最初死者に対して大なる恐怖感を抱いていたので、この段階では未だ祖先崇拜は成立しなかったことを明らかにする。次に第二章から第五章までは、しからば如何なる社会的条件の下に祖先崇拜が発生するかを論じ、その第一条件として農耕生活を挙げ、農耕とともに祖先崇拜の成立したことを、諸々の国の原史時代について実証する。しかして祖先崇拜の発生を農耕社会に求めたスペンサー以下の諸学者は、なぜに農耕社会において祖先崇拜が発生するかという問題には触れていないことを述べ、農耕は人間の定住性を高めるのみならず、家族員の生活の共同を緊密ならしめることが、長老者の鮮明な印象を他の家族員に刻み、この印象は彼等の死後も彼等の遺物・遺産・墳墓等によってしばしば触発されて、直観性に富み生氣ある憶起表象となることが、祖先崇拜の成立にとって重要であるとし、この点よりして水稻農業は祖先崇拜と最も深い関係のある所以を論ずる。さらに第二の条件として家父長制大家族を挙げ、強大な家父権が祖先崇拜発生の原因となることを指摘したパーソンズ以下の諸学者が、なぜに前者が後者の原因となるかの解明を試みていないことを述べ、まず家父長制大家族およびこれの背後にある宗族や同族部落の形態を広く歴史的に究明し、この家族の存立する社会の封鎖性のゆえにあらゆる生活は伝統によって支配され、伝統に通じ物事の伝統的な処理に長じている長老者が権威をもつとともに、家族員相互の接触が永続的に人格のあらゆる面において反復されることによって、成員相互の了解は生のあらゆる細部に及ぶがゆえに、細部にゆきわたる主情的な配慮が交され、長老者と他の成員は慈愛と孝悌をもって結ばれやすく、かくして生前から尊敬と感謝を捧げられていた家父長がこ

の世を去って後は、敬慕追憶の対象となるとともに、死による転変のゆえにこの世ならぬ神格を帯びたものとなって、尊崇崇拝の対象となとする。

さらに第六・七章においては、祖先崇拝が社会生活に及ぼす影響を論究する。まず祖先に最も近い地位にあって祖先と現存家族員との仲介の役をもち、祖先を代理しこれと一体となって祖先の道を踏み行なう家父長の地位が、祖先崇拝によって支持強化されるところ大なる所以を、広く歴史的事実によって論述し、次に、祖先の祭祀の継続および家産の保持を期待要求する祖先崇拝によって、家の相続に関するさまざまな観念や制度・慣行の生じた所以を論述する。最後に参考論文においては、まず京大社会学教室が戦後十余年継続して行なった日本の農山漁村の実態調査の報告書を資料として、現在の日本村落民が祖先崇拝に関して抱いている観念や態度を統計的操作によって綿密に考察し、その結果、祖先崇拝の念の最も厚いのが純農村であり、漁村がそれに次ぎ、山村と都市近郊農村が最下位にあること、また年令層の高くなるにつれて、祖霊に対して手厚い態度をとることを明らかにした。次に上のごとき傾向は何に起因するかを論究して、祖先崇拝の衰頹の社会的条件の解明に努める。すなわち、国家機能の整備充実・資本主義の発展・交通通信の発達等々による社会の地域的および身分的区画封鎖の崩壊は、社会的移動を昂進せしめ、人間の定住性・家族員の共同生活・伝統的生活様式等々の減弱を促すために、家父長制大家族が崩壊して近代的小家族が急増し、家父長権が無力化し、家族間の慈愛と孝悌も稀薄になって、祖先崇拝の成立存続を促進強化した要因が何れも衰頹するがゆえに、祖先崇拝もまた衰頹する所以を論述する。かかる論旨を村落調査の結果に結合し、山村が自足性の欠如の著しいために出稼ぎその他によって都市との接触交渉に富み、近郊村に類似して近代化されやすい場合が少なくなく、かかる山村では家族員の生活の分離・家族関係における主情性の稀薄化を初め、祖先崇拝を支持強化する要因が衰頹することを明らかにし、同様の事情が漁村にもあるので、農村が祖先崇拝の態度において最も厚いこと、また同様にして若年層が近代化の影響を最も多く受けやすいことを論ずる。

論文審査の結果の要旨

祖先崇拝が如何なる社会および家族において成立存続したかを指示した学者はあるが、なぜにそのような社会ないし家族において祖先崇拝が成立存続したかという問題の解明を試みた学者はほとんどなかった学界の実状に鑑み、本論文の著者がこの問題をとり上げて、社会および家族の集団構造および人間関係という社会学的観点から解明に努力し、あわせて祖先崇拝の衰頹の問題をも論究したことは、大いに注目に値する。しかして論述は詳細懇切であり、さまざまな事実によって実証的に進められ、論旨は概ね肯綮に当たっている。問題の性質上論究は未開社会・原史時代・古代から現代にまで及び、洋の東西にわたるがゆえに、細部において不備不明確な点があるとしても、大綱においては整合性を失わず、矛盾や誤謬として特に挙げるべきものは認められぬ。先学の所論に対して反対意見を提示している箇所ももちろんあるが、これらの所論は何れも或種の公式論や特定単一因素のみに基づいて下された断定であって、これらに対して明快な批評を加えている著者の論断は正当であることが感ぜられる。著者が祖先崇拝に関する自己の理論を村落の実態調査に組み入れ、その理論の妥当性を社会の現実に即して検証せんとするとともに、現実に認められる事実で理論的解釈を下さんと努力したことも、社会科学の領野に戦後漸く興り来った実態調査の意義を発揮せしめ、新しい研究方法を単なる事実の蒐集羅列を超えて前進せしめた一例を呈示す

るものと認められよう。しかしながら著者の研究が独自のものであり、他に同種の調査研究はなされていないので、今後同種の調査が重ねられ、同種の資料が堆積するにつれて、一層妥当性に富む論断が得られるであろう。また著者は崇拜の対象たる祖霊の神聖性のごとき祖先崇拜の宗教的内実の闡明においては十分とは言い難く、この方面に研究を拡充することを期待したいが、祖先崇拜を規定する社会的要因ないし条件の究明においては、従来学者が閑却していた領域を開拓して成果を挙げたことは少なからざる貢献と認められる。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。